

日本IT書紀

035 米騒動

03 未剖篇
卷之四 曙光

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第三十五

米騒動

一

成金が湯水の如くに金を使う一方、庶民の生活は苦しくなつていった。物価の上昇に給与が追いつかなかつたためだった。

一九一三年（大正二）の平均値を一〇〇とする指数で見ると、一九一八年の株価は一七九・三だった。これに対して卸売物価は二一六・六と、実に倍以上に跳ね上がった。わずか五年で物価が倍以上に値上がりしたのでは、庶民の生活が逼迫したのも当然だった。

ことに公務員がひどかった。

公務員は「社会への奉仕者」「納税者の養い人」ないし、地域の名士・富農の名誉職という位置付けだった。中央官庁の上級職は別格であつて、行政職員や教員、警邏など現業部門の一般職員は民間企業の勤め人より給与が低かつた。

——何も作っていないのに給料がもらえる楽な仕事。

というのが一般の感覚だった。米を作ることが最もたい

せつな仕事と考えられていた時代である。

インフレで庶民の生活がいかに圧迫されていたかを端的に示す投書が、一九一八年（大正七）二月の「東京朝日新聞」に載っている。投書の主は小学校の教員であつた。

自分は月俸二十円の小学校教員である。家族は自分等夫婦のほか、親一人、子供二人の五人ぐらし。米は平均一人前三合として日に一升五合、一カ月四斗五升は要る。一升二十四銭として月十一円二十五銭、野菜、味噌、しょう油、マキで三元。冬季は炭が二十貫要るとすると、十貫目三元として六円。石油が二升、一升三十銭として六十銭。すなわち必要欠くべからざる生活品だけでも二十円八十五銭になる。しかも互助会といつて四十銭を天引かれ、茶話会費といつては二十銭を引かれるので、実際手に入る金は十八円余。これでどうしてくらしてゆけようか。

——何ともみみっちい。

と責めてはいけない。

地方の教職員は現今のように公務員として扱われず、給料は低く預貯金もなく、かつ第一次大戦後のインフレと不況で給料が未払いというケースが続出していた。教員だけのことではなかつた。また、都市地域に限つた現象でもな

かった。

農村地域では毎月の安定した現金収入がなかったために、生活費の高騰はさらに悲惨な事件を起こしていた。日吉明助という人が書いた『貧の研究』という本には、当時、実際にあった様々な出来事が記されている。

米は豊作が続いていたにもかかわらず、値上がりに歯止めがかからなかった。標準米の価格は、一九一六年に一石（十斗＝百升＝千八百リットル）当り十三円二十六銭だったが、一七年には十九円三十五銭に、一八年には三十一円八十二銭に高騰した。

都市部における白米の平均売価は、一八年一月現在で一升三十銭前後であったから、新聞に投書した教員の妻は必死に安い米を探し回ったのかもしれない。

米価が高騰した原因としては、都市人口がにわかに増えた結果であるとする説がある。

農村部の働き手が都市に流出し、生産に従事する労働力が減少した。これに対し、消費する人口だけが増え、需給バランスが崩れた、という。

また一九一六年の米が天候不順による不作という事実もあった。

だがそれだけが原因ではなかった。山東半島や満州での緊急時に備えて、軍隊が米を大量に購入したのである。こ

のため、少しでも高く売ろうと農家や仲買人が出し惜しみをした。加えて寺内内閣は地主階級が主な地盤であったため、思い切った米価安定策を講じなかった。

そのために米もまた、第一次大戦後の投機の対象となつたといわれている。「物価騰貴に処する中流主婦の覚悟」と題した評論を、雑誌「主婦之友」が掲載したのはこのころである。

寺内内閣が示した「シベリア出兵」計画は不評だった。その原因は、世界規模で政治・経済の構造が変化していることへの警戒心ではなく、苦しい生活を余儀なくされていた庶民が、無駄な戦費の自粛を求めたことによっていた。

二

一九一八年。

この年の米は、前年までと打って変わった天候不順のため、かつてない凶作が予測されていた。農家や米問屋が出し渋った。加えて北陸地方の漁師の家は、北海道のニシン漁が振るわなくなつたため、出稼ぎの場所を失っていた。そこにシベリアへの出兵が追い討ちをかけた。

こうした中で、その年の七月二十三日、富山県の魚津でちよつとした騒動が発生した。

発端はその前夕、魚津の漁師の女房たち三、四人が井戸端会議で、

「米が、この港から積み出されているそうな」

「そりゃ、ますます米が足りなくなつて値上がりするわ」

「富山の米を、どうして富山の人間が食えんのか」

と話したことにあつた。

事実、魚津港には伊吹丸という輸送船が停泊していて、県内産の米を次々に積み込んでいるさなかつた。

翌日、米の県外積出しを阻止しようと四十六人の主婦が海岸に集まつた。駆けつけた警官が説得してこの日は何ごともなかつた。魚津での出来事が近隣の村々に伝わると、それぞれの地域で小規模な集会が開かれ、

「米の県外持ち出しを阻止すべし」

という声が自然に形成されていった。

それから六日後、東京の店頭で販売される米の値段がいちだんと吊り上がった。一円で二升四合というから一合が四十二銭である。三十一日、ついに東京米穀市場は取り引きの立会いを停止するにいたつた。

八月三日になると、近隣の漁師の女房も参加して、総勢約百八十人が魚津の西水橋町の海岸に集まり、やがて隊を組んで米屋や有力者の家などに押しかけた。翌四日夜、隣接する東水橋町で漁師の家族など六千七百人が米屋などに

押しかけた。

八月三日付「東京朝日新聞」記事。

富山県中新川郡西水橋町町民の大部分は出稼業者なるが、本年度は出稼先なる樺太は不漁にて、帰路の路銀にも差支ふる有様にて、生活頗る窮迫し、加ふるに昨今の米価暴騰にて、困窮愈其極に達し居れるが、三日午後七時漁師町一帯の女房連二百名は海岸に集合して三隊に分れ、一は浜方有志、一は町有志、一は浜地の米屋及び米所有者を襲ひ、所有米は他に売らざること及び此際義挾的に米の廉売を嘆願し、之を聞かざれば家を焼払ひ、一家を襲殺すべしと脅迫し、事態頗る穩かならず。斯くと聞きたる東水橋警察署より巡查数名を出動させ、必死となりて解散を命じたるに、漸く午後十一時頃より解散せるも、一部の女達は米屋の附近を徘徊し米を他に売るを警戒し居れり。

地元紙「高岡新報」は八月五日付で次のように報じている。

朝来、同町の女房子供は三々五々なにごとかひそかに語りあいて不穩の模様ありしが、がぜん薄暮七時頃にいたるや、おのおの家をでて海岸に集合する者六、七百名の多数

におよび、町長、町議に瀕死の窮状を訴え、ともに米屋、地主の家に押しかけ、署員全部この女軍の解散につとめるも、多勢に無勢にて警官の制止に耳をかさず、全町わきかえるが如き騒擾のうちに夜半十二時すぎにようやく鎮静。

当夜なかならず喧騒をきわめたるは新上町高松長太郎方にて、目下白米千俵を所有せるにより、数百名の女軍の一隊は同家をおそい、居合せたる長太郎妻に対して米を売るなどというや『私の所は商売だから売るも売らぬも勝手なり』と言放ちしことから女軍はおおいに怒り、悪罵をあげせかけ、殺気立ちて一時はいかなる樁事を出来せんかはかりがたき形成。

米を売れと迫る女軍に

「うち商売だからね。誰に売ろうが売るまいが勝手じやないか」

と言いつ返しした米屋の女房の気魄がすごい。

この勢いは翌日も続き、制止した警官が負傷したことかから、男一名、女三名を検挙したところ、警察署をデモ隊が包圍して釈放を求め、さらに東京に向けて動き出した貨物列車から米数百俵を荷降ろした。

翌七日になると東西水橋町の町民と滑川町の町民が合流して一万人を超える暴徒となり、伊吹丸に米を積み込もう

としていた船員、沖仲士などに暴力をふるい、夜半にいたって二千人が米屋を襲撃して破壊行為に及んだ。

米騒動の発端であつた。

三

八月初旬にこの騒動は富山全県に広がり、收拾がつかないうち全国各地に飛び火した。

「大阪朝日新聞」八月十日付記事。

岡山精米会社の特等白米は、暴騰また暴騰ついに五十円七十銭（一石）となり、市民一般さんたんたる状態におちいりたる折柄、岡山市内山下吉田石蔵（三八）、森下町水沢三太郎（三六）らは十数名の若者と語らい隊を組み、九日午前九時半岡山米穀取引所におしかけ、立会の終わるのを待伏せ、貧乏人の敵だ、たたき殺せとわめきたて、鉄拳をふるって仲買人らに喰つてかかり、客筋連はろうばいして逃げまよう騒ぎに、数百人の群衆、喧嘩の渦にまさこまれ、口々に『仲買人は人類の敵だ』と絶叫し、アワヤ一大事に及ばんとしたり。急報に接し、岡山署にては各駐在巡查を召集し、署員また現場へかけつけ、ようやくにして取りしずめ、警察署へ連行した。

同じ八月九日には、岡山県津山町、香川県高松市などでも類いのデモがあった。

大がかりで深刻だったのは、京都、名古屋など大都市で発生した騒動——ほとんど「暴動」といいいい——だった。

京都市で八月十日に起こった騒動は、買い占めによる米不足と米価の高騰に怒る民衆の蜂起とは趣が異なった。中心になったのは、そのころ京都市郊外にあった被差別部落だった。

戸数は一千六百戸、人口は七千余人を数えていた。日ごろから何かと差別を受けていたために、その半数以上は「貧」を通り越し、「極貧」というべき生活を送っていた。米価の高騰をきっかけに、日ごろの鬱憤が爆発したといっている。

夜八時すぎ、一団の群衆が市内東七条の巡査派出所を襲った。重さ四キロに近い石を投げつけて派出所の表戸を破壊した後、七条高瀬川下ルに店を構えていた沼田米店の表戸を壊して乱入した。沼田米店は米の売り惜しみで市民から疎まれていたので、観衆が騒動に参加し始めた。

数を倍以上に増やした群衆は誰いともなく数隊に分かれ、沿道の市民をさらに加えながら、その夜のうちに三十

軒以上の米屋に石を投げ、「白米一升三十銭で売ります」と半紙に書かせてこれを表に貼り出した。

鎮庄に出動した警察が十四名を逮捕したが、数十名が七条署に押しかけて釈放を強要した。このため、遂に京都憲兵隊が出動した。

翌日夜には市内の十数か所で暴動が起こった。

その数は二万人に達したという。

もはや警察力では抑えきれないと判断した京都府は、知事の名で陸軍第十六師団に出動を要請した。伏見から歩兵二百、騎兵六十三が出動した。

西三条北小路地域の四囲をすきまなきまでに包囲し、戸毎に同夜の暴動に関係ありとみとめたものを拉致し、三十余本の竹槍、棍棒、その他の利器に付着したる血痕目じるしを根拠に、強烈なる検挙をはじめ、六十余名を逮捕。

と「京都日出新聞」は記す。

この京都の騒動から、米騒動が質的に変わった。

政府は十三日に

——米穀を強制的に買い上げるため、一千円程度の国庫支出を行う。

と決定し、翌十四日、米騒動に関する報道を控えるよう

新聞各社に要請した。しかし民衆の意識は米の問題から離れていった。

市民や労働者の暴動は米問屋の打ちこわしにとどまらず、米不足とまったく関係のない地方の豪農・豪商が焼打ちにあつたり、警察署が攻撃されたりした。米の暴騰そのものでなく、経済の不安定と社会の格差を誘発した資本家、資本金家をなすがままに放置した政治への不信、差別への怒りが折り重なり、政治的な運動に転換していく。

京都市で被差別部落の住民を中心に騒動が起こっていた八月十日、名古屋市では

——鶴舞公園で集会のあと、米買占めの仲買人を懲らしめるそうなの。
という噂が流れていた。

その根拠ははっきりしなかったが、午後八時過ぎまでに、噂を聞きつけた市民六千人が鶴舞公園に集まった。公園に向かう電車が超満員で、午後九時には参集者が二万人を超えた。しかし警察が総動員で米屋町への通路を遮断したため、群集は午前一時過ぎに散りじりになった。

翌日夜、同じ鶴舞公園には前夜をはるかに上回る群集が集まっていた。

このときのデモは、とうとう警官隊ともみ合いになり、三十三人が騒擾罪で逮捕されている。暴徒化した民衆の鎮

圧には、旧士族や元軍人・警官などで組織する郷士会がその一翼を担った。日の丸の鉢巻を締め、剣道着の袴の裾をからげた五十年配の男たちが、白刃や木刀で武装してデモ隊に立ち向かった。そういう写真が残っている。

首相・寺内正毅は最後まで米騒動の本質を理解できなかった。シベリア出兵を強行したことが政治家寺内の命取りとなった。憲政会が政府の対応を非難し、近畿関西新聞記者大会が内閣弾劾を決議し、その波が東京に及んで初めて、彼は二進も三進も行かない袋小路に追い込まれたことを察知した。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

北海道のニシン漁 一八九七年に九十七万トンの漁獲高を記録したのをピークに、道南地区から順次、漁獲高が低迷していった。北陸地方は江戸期、松前船を通じて北海道と深い関係があり、この地方の農民や漁民がニシンの季節になると北海道に出稼ぎに行った。田植えが始まる前のひと稼ぎという意味で都合が良かった。現在、北海道各地に残る「ニシン御殿」はいずれも大正期に建てられた「記念碑」的な存在が少なくない。

なぜニシンが北海道の海から消えたのか、その原因には①乱獲②太陽黒点の活動の影響③海水温度の上昇④森林の伐採——などが指摘されている。このうち「森林の伐採」説が最近になって有力視されている。ちなみに北原ミレイ唄うところの『石狩挽歌』(なかにし礼作詞、浜圭介作曲)は、なかにし礼自身の体験でもある。

騒動の波及 富山県で発生した米騒動は一部三府三十八県三十九市百三十四町百四十五村に及んだ。うち七十以上の市町村で軍隊が出動した。

京都日出新聞 一八七九年「京都商事迅報」として創刊され、「商事迅報」「京都新報」「京都滋賀新報」「中外電報」など紙名が様ざまに変わり、一八九七年「京都日出新聞」となった。一九四二年、戦時下の新聞統合で「京都日日新聞」と合併して「京都新聞」となった。

米騒動の質的变化 七月二十二日から八月十日前後までの騒動は米の売価高騰と売惜しみに対する庶民の怒りが爆発したかたちだ

った(第一期)。しかし八月十二日、名古屋市の騒動に軍隊が出動した時点で騒動は「労働者対資本家」の関係に変質した(第二期)。次いで八月十七日にいたって山口県宇部市の沖ノ山炭坑における騒動で軍隊が実弾を発射し死者十三、重症者十五人を出した時点で「庶民対国家権力」の構図に変化した(第三期)。福岡県峰地炭坑の騒動で抗夫たちは炭坑からダイナマイトを持ち出して対抗した。



# 日本IT書紀 035 米騒動

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。